
【改訂版】LEGEND アルザス編

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【改訂版】 LEGEND アルザス編

【Nコード】

N5322U

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

クーデターに失敗し逃亡中のアルザス王家第二王位継承権を持つセフ。五年後に彼が戻った時、祖国は危機に瀕していた。共に冒険をしてきた仲間たちをも巻き込み、因縁と復讐、謀略と愛憎の、複雑に絡んだ系は解けていく。（某所の導きに従い、改訂作業中）

第一章 第一話（前書き）

同名作品の改訂版。

前の文を気に入ってください。た読者様のことを考え、未改訂の分とは別にUPします。

第一章 第一話

今ではない時。

ここではない場所。

見も知らぬ世界。

……そんな場所で、物語は始まった。

馬車は西を目指している。

国境を越えて、西の大国アルザスへ入ろうというのだ。

長い旅路に幌は煤けて黒くなり、車輪は軋んで怪しい音階を発し、ギシギシと大地を摺りながら廻り続ける。昼夜を問わず歩き続けた二頭の馬は、互いを気遣うように時折鼻先を擦り合う仕種を見せた。黒と褐色のたてがみがその度に揺れる。

荒野と呼ぶに相応しい大地は、渴いた風を運び、生命の持つ僅かな潤いさえ奪い取ろうとする。

薄闇の中、奇怪な岩礁の影に枯れた下草の白さだけが浮き上がって見える。道というべきものはない。

満天の星空を遮る雲は一片もない。

仄かな明るさは、頭上に昇る満月のせいだ。

青白い光が西へ向かう馬車と荒野の景色を照らしている。

馬車の中には四つの影が、一人は敷布に丸まり三人は座していた。一行は疲れていたが、怪我人はない。

言いそびれていたのだから、ここへ来て突然、一人が口を開く。

「俺はアルザスへは入れない。山間の村があるから、そこで下ろしてくれ。」

若い戦士は、そう言うなり動きだし、自身の荷物をまとめ始めた。愛用の曲刀に手を伸ばし、鞘から外して刃こぼれを見る。

魔法剣、ツイン・ファイア・ソードには仕掛けがある。魔力の装置もさる事ながら、遣い手の意思で組まれた二本が一本になる。変

人と名高いガーラントの作。変り者の鍛冶師は多くの名刀を打った。そのうちの一組。粉を打ち、目釘をあらため、鞘へ戻す。カチリと鳴った。

鎧の類は着ていない。黒を基調としたストールの下にヘンプ生地 of 衣装。通常の旅装だけで済むのは彼が異常とも云える魔力の持ち主だからだ。多く魔族はその身を防御する為の装備など不要であり、彼もまた、魔族に劣らぬ力を持つ為、甲冑の類は必要なかった。

魔剣の主、そして、手練れの幻獣使いであり魔道と剣術を同時に行使する器用な男。一同が知る青年のプロフィールは多くが謎のままだ。少ない情報の中には確か、この青年が目指す大国の出身であるという項目が含まれていたはずだが。

「セフ、確かアルザスの生まれじゃなかったのかい？」

大柄の美女、アマゾネスの戦士であるルシーダが、眉をひそめた。祖国に戻れない者といえば、お尋ね者以外に思いつく言葉もない。

黒い肌。ちぢれた長い黒髪を無造作に編み込んで後ろに流した髪型は、彼女の国での流行のヘアスタイルだった。胸も豊満だが、男並みの筋肉に混ざりこむと胸筋にしか見えない。なめし革で出来た軽量の鎧を素肌に直接纏い、豹皮の腰巻を斜めに結んでいる。アマゾネスは戦闘種族であり、鎧の類が彼女等の好むファッションでもあった。

腰の毛皮に武器を収納するためのポーチをベルト代わりに巻く。彼女の得物は弓と鎖鎌だ。

セフ、と呼ばれたアルザス人は、彼女の言葉で手を止める。鼻で笑うと初めて自身の事を語り始めた。

「……俺はアルザス王家の末席でな。クーデターに失敗して逃亡中なのさ。」

戻れるわけがないだろう？」

皮肉を含んだ声は自嘲の笑みに溶けている。

セフの青い瞳が、特徴のある光を放って煌く。夜行動物のように、

この青年の目は夜になると輝く。

何か言いかけたルシードが、続く彼の言葉に押し黙る。

「なぜそんな事になったかは聞かないでくれ。……知らない方が、お前たちの為でもあるしな。」

首尾良く例の薬草を手に入れたら、落ち合おう。それまではグレイス溪谷の村で息を潜めてるよ。」

それ以上の詮索を阻止して、彼はまた荷物を纏める作業に戻る。

グレイス溪谷は彼等の行く手、アルザスとこの荒野を隔てるように横たわる山脈に位置し、彼の国へ至る経路の一つになっている。

一行は、アルザスでしか入手出来ないある種の薬草を求めていた。大國アルザスに集まる遠方のキャラバンが運び込む、別の大陸の産物。

薬草の産地と入手のための方法は、彼等が独自で調べ突き止めたものだ。

受けた依頼の大詰めに差し掛かっていた。

アルザスに近づくにつれ、荒野は緑を芽吹いて景色を変える。

遠く、山脈が見え始める頃に、馬車は停泊の為に軌道を逸らした。

「アルザスの情報を教えてくれよ。何でもいい、知ってる限りで。」
馬車を繰る手を休め、小柄な少年がセフに問い掛けた。馬車を引く馬は賢く、勝手に進路を逸れたりはしないものの、時折は修正してやるために御者席に誰かが座らねばならない。雑用の多くを手がけるのは、彼の役割であった。押し付けられるでもなく、好きでやっている。

少年のように見えるが、これでセフより年上だった。

彼はドワーフの血を引いている。拘りの強い種族。武器の目利きは確かで、彼に任せておけば決してハズレを引くことはない。そして、魔族にも詳しいため、戦闘には欠かせないメンバーだった。

名前はナッツ。通称であり、素性と共に本名は誰にも明かさない。冒険者とはそういうものだ、常に危険と隣り合わせ、リスクを最小

限に回避するため互いに余計なことは詮索しない。

彼もまた、セフ同様に鎧の類を身に付けてはいない。魔法防御のアイテムをより好んだ。

そも、魔力がものをいうこの世界においては、物理的防御の高さなど殆ど意味を為さなかった。強力な魔法攻撃の前には、鎧など紙切れ同然だ。よって、ステイタスの意味合い程度でしかない。

一行はもう一人、馬車の隅ですやすやと寝息を立てる少年とを入れた四人だが、遠く東のカルーア公国に二人の仲間を置いて来ている。公国の田舎町に依頼人は住んでいた。

眠っているのは、先の戦争で滅ぼされたグラン・シルバの王、アスレイの息子フィル。同じ王族という身分でも、こちらは故国から持ち出した白銀の鎧をずっと身に纏って放した事がない。

ふと、フィルの寝顔を見やり、セフはふたたび口を開いた。

「……こいつとは境遇が似ている。」

だからかな、つい、肩入れしてこんな所にまでのこのこと帰って来てしまった。俺はお尋ね者だと言うのにな……。」

一行の戦闘は、セフの力に拠るところが大きい。主戦力としての自覚が彼の決断を鈍らせ、ここまで来させた。光る瞳が、宝石のように闇の中でその存在を知らしめている。

馬車は木の陰で停止した。下草が豊富で、馬は勝手に辺りの草を探っては食んでいる。もう一頭の轡も外してやってから、ナッツは馬車の中へと馬具を仕舞いに戻った。

誰かが、外で火を起こした。幌の入り口が明るくなる。

「ん……？」

気配に気付いたのか、フィルが目を覚ます。

「よ、子供は寝る時間だぜ？」

ナッツのからかうような台詞に、フィルはムツとしたように勢い良く跳ね起きてみせた。

火を焚いたのはルシーダだ。

馬車が軌道を変えた時にはすでに薪の準備を終えていた。二日、三日の薪や食料ならば載せてある。長い旅になりがちな冒険者には、馬車が必須となる。

今回は、通常以上に長く馬を歩かせてきた。日陰すらない荒野には、休息に適した場所がなく、かと言ってこの悪路では蹄鉄の減りも馬鹿にならない、馬の脚を傷めてしまう。騙し騙しに此処まで来させたものの、さすがに休ませてやらねばならず、荒野を進みながら夜営に適した場所を探っていた。

照らし出されたそれぞれの顔。ナッツが促すようにセフに視線を送る。

一通りを見回して、セフは続きを語り始めた。

「まず、忠告しておこう。」

王宮には近付かないことだ。国王……俺の兄は、異常に好奇心が強い。珍しいものは大好きな方だ。どれほど苦勞して手にした宝であつても、兄に見せれば大枚の金貨に交換されてしまう。カルーアを出る時に、真実珍しい宝は置いてゆけと言つたな？ それは、このせいだ。」

なにやら厄介そうな王様らしい……一同は眉をひそめた。

それだけじゃない、セフの忠告はさらに続く。

「ミーアとエシャロットも危ないから置いてきたんだ。……ハーレムには美女がひしめいているが、とにかく珍しい物が好きなお方だからな、……人間も同様だ。」

ミーアの変化の魔法、エシャロットの虹の瞳、共に見せたら最後だ。……ま、それさえ無ければ、国民にも慕われる善良な王なのだ。……」

「アンタが家出してるのも、そのせいかい？」

軽口でルシーダが返すと、セフは口元だけで笑みを遣した。

「捕まれば、今度は鎖で繋がれるだろうよ。兄上は俺の目に御執心だつたからな。」

夜に輝く月の瞳が、また、煌いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5322u/>

【改訂版】LEGEND アルザス編

2011年7月5日03時10分発行